

新約聖書の奥義 第26回 「奥義としての神の国」の特徴を教える9つのたとえ話 ②

□はじめに（前回「9つのたとえ話の第一『種まき』」の要旨）

1. 「奥義としての神の国」の特徴を教える9つのたとえ話

イエスは、イスラエルの指導者層から公式にメシアではないと拒否された日、その日のうちに、9つのたとえ話を語った。群衆に対して5つ、その後で弟子たちだけにさらに4つ、合計9つである。この一連のたとえ話は、奥義としての神の国の特徴を教えるためのものである。マタイ13章、マルコ4章、ルカ8章に記されている。

2. 一連のたとえ話を理解する鍵は、一つ目のたとえ話「種まき」にある（マルコ4:13）

3. 9つのたとえ話の第一「種まき」

(1) 奥義としての神の国の時代的特徴は、**福音の種まき**がされることである。

(2) その種まきは、**3つの妨害**を受ける。

- ① 悪魔（サタン）からの妨害
- ② この世からの妨害・・・「困難や迫害」
- ③ 内なる肉（罪の性質）からの妨害・・・「この世の思い煩いと富の誘惑」

(3) その種まきには、**異なる土壌が準備される**。この世（人々、地域、国）が一様に反応するのではなく、ある部分は、他の部分よりも、福音の種まきに対して良く応答する。土壌（応答）の種別は4つある。

- ① 道端
- ② 岩地
- ③ 茨の生えた地
- ④ 良い地

(4) その種まきは、**4つの応答**を受ける。

- ① 第一は不信仰の応答である。このとき、まかれた種をついばんで奪っていく鳥は、悪魔とその配下の悪霊たちである。悪魔は福音の種まきを妨害する。
- ② 第二と第三の応答は、信者ではあるが、実を結ぶことのない信者の応答である。第二はこの世からの妨害、第三は内なる肉（罪の性質）からの妨害を受ける。そのために実を結ぶことのない信者である。
- ③ 第四の応答は、実を結ぶ信者の応答である。

種まきのたとえ話に続く4つのたとえ話

1. まかれた種は自ら育つことのたとえ話（マルコ4:26～29）

神の国はこのようなものです。

人が地に種を蒔くと、夜昼、寝たり起きたりしているうちに種は芽を出して育ちますが、どのようにしてそうなるのか、その人は知りません。

地はひとりでに実をならせ、初めに苗、次に穂、次に多くの実が穂にできます。実が熟すと、すぐに鎌を入れます。収穫の時が来たからです。

- (1) まかれた福音の種は、内部にエネルギーを持っている。それ自体のいのちによって芽を出す。
- (2) 芽を出すかどうかは、蒔いた人には、よらない。
- (3) 人の働きは、種を蒔くこと。蒔かれた種が発芽成長し、実を結ぶのは、人の力ではない。蒔いた人は、種を蒔いたら、その後は、何もすることはできない。

【参考】 I コリ 3:5～7 アポロとは何なのでしょう。パウロとは何なのでしょう。あなたがたが信じるために用いられた奉仕者であって、主がそれぞれに与えられたとおりのことをしたのです。私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です。ですから、大切なのは、植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神です。

2. 毒麦のたとえ話（マタイ 13：24～30、メシアによる解説マタイ 13：37～43）

内容	たとえ話	解説
① 真の種まき	天の御国は次のようにたとえられます。ある人が自分の畑に良い種を蒔いた。	良い種を蒔く人は人の子です。 畑は世界で、良い種は御国の子ら、
② 偽の種まき	ところが人々が眠っている間に敵が来て、麦の中に毒麦を蒔いて立ち去った。 麦が芽を出し実ったとき、毒麦も現れた。 それで、しもべたちが主人のところに来て言った。 「ご主人様、畑には良い麦を蒔かれたのではなかったのでしょうか。どうして毒麦が生えたのでしょうか。」 主人は言った。「敵がしたことだ。」	毒麦は悪い者の子らです。 毒麦を蒔いた敵は悪魔であり、
③ 神の許容	すると、しもべたちは言った。「それでは、私たちが行って毒麦を抜き集めましょうか。」しかし、主人は言った。「いや。毒麦を抜き集めるうちに麦も一緒に抜き取るかもしれない。だから、収穫まで両方とも育つままにしておきなさい。」	
④ 世の終わりで の 神の裁き	収穫の時に、わたしは刈る者たちに、 まず毒麦を集めて焼くために束にし、	収穫は世の終わり、 刈る者は御使いたちです。 ですから、毒麦が集められて火で焼かれるように、世の終わりにもそのようになります。 人の子は御使いたちを遣わします。彼らは、すべてのつまずきと、不法を行う者たちを御国から取り集めて、火の燃える炉の中に投げ込みます。彼らはそこで泣いて歯ぎしりするのです。
⑤ メシアの 王国	麦のほうは集めてわたしの倉に納めなさい、と言おう。」	そのとき、正しい人たちは彼らの父の御国で太陽のように輝きます。 耳のある者は聞きなさい。

第一の「種まきのたとえ話」(マタイ 13:3~9、18~23)と比較すると・・・

	種まきのたとえ話	毒麦のたとえ話
① 種を蒔く人	弟子たち	良い種を蒔く人=人の子(メシア) 毒麦を蒔く敵は、悪魔
② 種	御国のことば	良い種=御国の子ら(御国のことばを 信じる信者たち、弟子たち) 毒麦=悪い者の子ら(悪魔に捕らえら れたままの不信仰の人々)
③ 蒔く場所	道端、岩地、茨の間、良い地 弟子たちが福音の種まきをすると、 聞いた人の心の中に、みことばの種 が蒔かれる 人は4種類の応答をする	畑=世界 メシアは弟子たちを良い種として世 界中に蒔く(エルサレムから散らされ ていく)
④ 妨害者	鳥=悪い者 道端の応答をする人の心の中から、 みことばを奪う	敵=悪い者=悪魔 悪魔は、偽の種まきをする。特に、悪 魔の策略に乗って、人々を真の神に向 かわせない働きをする人々を起こす。 悪魔はそういう人々を栄えさせ、富と 名誉(人からの称賛)を与える。
⑤ 種まきの 結果	道端の応答=信じない人 岩地の応答=信者であるが、この世 から受ける困難や迫害により、つま ずく 茨の地の応答=信者であるが、この 世の思い煩いと富の誘惑により実 を結ばない 良い地の応答=豊かな実を結ぶ信 者	麦が芽を出し実ったとき、毒麦も現れ た=使徒たちの宣教により地域教会 が立ちあがって行く中で、偽教師など の問題が起きた。 2度にわたるユダヤ戦役の結果、教会 はユダヤ人信者を排斥、かわりにギリ シア哲学を導入。 さらに、キリスト教が国教となって、 信者も不信者も「キリスト教国の民」
⑥ 神の計画		奥義としての神の国の終わりまで、麦 と毒麦が併存するのを許容する。 人の裁きでは、間違うから。
⑦ 神の裁き		奥義としての神の国の終わる時に、毒 麦は集められて焼かれ、麦はメシアの 王国に入れられる。

- (1) 毒麦のたとえ話（マタイ 13 : 24～30）には、4つのポイントがある。
- ① 1番目と2番目のたとえ話で語られた福音宣教の種まきは、真の種まきである。
『これに対抗して、偽の種まきが巧妙に行われる』というのが、毒麦のたとえ話のテーマである。「毒麦」と訳されている原語が指すのは、「ダーネル（darnel）」という種類、種は本物の小麦と外観がそっくりである。種から芽生えた茎や葉もよく似ている。穂をつけて初めて、穂の姿で見分けられる。偽の種まきは、巧妙に「福音」らしく装い、良いものに見えるというのが、ポイントである。
 - ② 二つのタイプの種まきがされた結果、良い麦も、毒麦も、同じ畑の中で、隣り合わせて成長していく。
 - ③ 「奥義としての神の国」の時代の終わりにおいて、判定がなされ、良い麦は選り分けられてメシアの王国に入る。しかし、毒麦は除かれる。
 - ④ 真の種まきか、偽の種まきかは、最終的には穂をつけて良い実を結んだか、そうでないかによって明らかとなる。
- (2) イエスによる解説（マタイ 13 : 36～43）にも、4つのポイントがある。
- ① 真の種まきをするのは、人の子＝メシアである。
 - ② 畑は、この世界である。そして良い種は、御国の子たちである。御国の子たちとは、信者のことであるが、彼らは真理を携えて全世界に出て行く。使徒の働きに記録されているとおりである。
 - ③ 敵は、悪魔、サタンである。そして毒麦は、悪魔の子たち、すなわち不信者である。悪魔は、世界中にそのような人々を蔓延させる。畑とは「世界」であり、教会に限らないが、しばしば彼らは信者であるかのように、ふるまう。
 - ④ 刈り取りをする者たちは、天使たちである。この世の終わりの収穫の時とは、奥義としての神の国の時代の終了点、すなわち諸国民の裁きである。
 - この裁きについては、イエスは、このあと、マタイ 13 : 47～50「地引網のたとえ話」にて、弟子たちにも語る。さらに、預言として、マタイ 25 : 31～46「諸国民（異邦人）の裁きの預言」において語る。

【補足】

この世の終わりに起きる諸国民の裁きは、大患難期を生き残った異邦人が対象である。私たち教会の信者は、大患難期の前に、天に携挙されるので、この裁きとは関係ない。

この世が終わる前に、個人的に自分とこの世との関係が終わる時がある。それは、信者が肉体の死を迎える時である。信者の死について、重要なポイントを3つ挙げる。

- 信者の死の時は、イエスがお決めになる（Ⅰテサ 4 : 14「イエスによって眠った人々」）
- 信者の死の時、その霊魂が肉体から離れるとき、御使いたちが迎えに来てくれる（ルカ 16 : 22）
- 信者の霊魂は天のパラダイスに行き、復活の時、すなわち教会の携挙の時を待つ。
（携挙 → 天でキリストの裁きの座の前に立ち、清められる → キリストと教会との婚姻の式 → キリストの地上再臨に同行して地上へ → 婚宴・王国）

3. からし種のたとえ話（マタイ 13：31～32）

天の御国はからし種に似ています。

人はそれを取って畑に蒔きます。

どんな種よりも小さいのですが、生長すると、どの野菜よりも大きくなって木となり、空の鳥が来て、その枝に巣を作るようになります。

- (1) 奥義としての神の国は、拡大成長する。
- (2) 緑豊かな大木は繁栄と力の象徴（ダニ 4：11～12）であるが、「空の鳥たちが来て、その枝に巣を作る」。これは何を意味するのか。一番目のたとえ話では、鳥たちは、サタンとその配下の悪霊たちである。このからし種のたとえ話は、独立した教えではなく、一連の 9 つのたとえ話の一つである。従って、ここでも、「鳥」は、サタンとその配下の悪霊たちであると理解すべきである。
- (3) キリスト教界の中には、キリスト教であると標ぼうしつつも、本質的な教えを否定するような団体が現れる。
 【補足】本質的な教えのひとつは、「イエスが神であり、神が人となって来られたお方である」ということ（I ヨハネ 4：2）

4. パン種のたとえ話（マタイ 13：33）

天の御国はパン種に似ています。女の人がそれを取って三サトンの小麦粉の中に混ぜると、全体がふくらみます。

- (1) 女性が象徴的に用いられると、霊的あるいは宗教的な集団を指す。
 - ① いい意味の用例では、イスラエルは「ヤハウエの妻」であり、教会（目に見えない普遍的教会）は「メシアの花嫁」である。
 - ② 悪い意味の用例では、黙 2：20 の「イゼベル」、17：1～8 の「大淫婦」がある。
 - ③ このたとえ話では、悪い意味に使われている。教理的に誤った宗教組織を指す。
- (2) パン種は、罪の象徴（I コリ 5：6～8）。特にマタイの福音書では、誤った教えを指す（マタ 16：6、11～12）。
- (3) 「3 サトンの小麦粉」とは、歴史的にキリスト教界が 3 つの大きな組織に分かれることと符合する。ローマ・カトリック、東方正教（ギリシヤ正教やロシア正教）、そしてプロテスタントである。この 3 つとも「パン種」、すなわち誤った教理を持っている。